

## 集合論ノート 0012

### $\theta$ -cc poset と $\theta$ 以上の基数の保存, ccc poset と基数の保存

近藤友祐 (@elecello\_)

初稿: 2018/09/26 修正: 2018/10/08

この文書の場合: <https://elecello.com/works.html>

本稿では、特に断りの無い場合、 $M$  は ZFC の ctm,  $\mathbb{P}$  は poset とし、 $\mathbb{P} \in M$  を仮定する。

定義 1.  $\text{Card}(\theta)^M$  なる  $\theta$  に関して、

(1)  $\mathbb{P}$  が  $\theta$  以上の基数を保つ

$$:\iff \forall G: (M, \mathbb{P})\text{-generic} \forall \beta < o(M) \left[ \beta \geq \theta \rightarrow \left( \text{Card}(\beta)^M \leftrightarrow \text{Card}(\beta)^{M[G]} \right) \right]. \quad (1)$$

(2)  $\mathbb{P}$  が  $\theta$  以上の共終数を保つ

$$:\iff \forall G: (M, \mathbb{P})\text{-generic} \forall \text{limit } \gamma < o(M) \left[ \text{cf}^M(\gamma) \geq \theta \rightarrow \left( \text{cf}^M(\gamma) = \text{cf}^{M[G]}(\gamma) \right) \right]. \quad (2)$$

また、 $\theta = \aleph_1$  のときは「 $\theta$  以上の」を省略する。  $\square$

注意 2. 式 (1) の “ $\leftarrow$ ” は常に成り立つ。なぜならば、 $\text{Card}(\cdot)$  は  $\Pi_1$  論理式であるから、下向き ( $M[G]$  から  $M$ ) に相対化するため。また、式 (2) の “ $\geq$ ” は常に成り立つ。なぜならば、 $\subseteq, \sup, \text{type}$  の  $M$  や  $M[G]$  に対する絶対性より、 $\text{cf}^M(\gamma) = \min\{\text{type}(X) : X \subseteq \gamma \wedge \sup X = \gamma \wedge X \in M\}$ ,  $\text{cf}^{M[G]}(\gamma) = \min\{\text{type}(X) : X \subseteq \gamma \wedge \sup X = \gamma \wedge X \in M[G]\}$  であるが、 $M$  から  $M[G]$  へと  $X$  の検索範囲が広がった分、最小値としては落ちるため。  $\square$

補題 3.  $\text{Card}(\theta)^M$  を仮定する。このとき、

$\mathbb{P}$  が  $\theta$  以上の共終数を保つ

$$\iff \forall G: (M, \mathbb{P})\text{-generic} \forall \text{limit } \beta \left[ \theta \leq \beta < o(M) \rightarrow \left( \text{Reg}(\beta)^M \rightarrow \text{Reg}(\beta)^{M[G]} \right) \right]. \quad (3)$$

*Proof.*  $(\implies)$  右辺を示すために、 $(M, \mathbb{P})$ -generic filter  $G$ ,  $\beta : \text{lim}$  で  $\theta \leq \beta < o(M)$  なるものを取り、 $\text{Reg}(\beta)^M$  を仮定せよ。  $\text{Reg}(\beta)^M$  より  $\text{cf}^M(\beta) = \beta$  である。今、 $\beta < o(M) : \text{lim}$ ,  $\text{cf}^M(\beta) = \beta \geq \theta$  であり、 $\mathbb{P}$  は  $\theta$  以上の共終数を保つので、 $\text{cf}^M(\beta) = \text{cf}^{M[G]}(\beta)$  を得る。したがって  $\text{cf}^{M[G]}(\beta) = \beta$ , つまり  $\text{Reg}(\beta)^{M[G]}$  である。

$(\impliedby)$  左辺を示すために、 $(M, \mathbb{P})$ -generic filter  $G$ ,  $\gamma < o(M) : \text{lim}$  で、 $\text{cf}^M(\gamma) \geq \theta$  なるものを固定せよ。  $\beta := \text{cf}^M(\gamma)$  とする (want:  $\beta = \text{cf}^{M[G]}(\gamma)$ )。共終数を取ると値が落ちるので  $\beta \leq \gamma < o(M)$  である。  $\beta < \theta$  であれば、 $\text{cf}^M(\gamma) = \beta < \theta \leq \text{cf}^M(\gamma)$  となり矛盾するので、これは起こり得ない。そこで  $\beta \geq \theta$  の場合を考える。極限順序数の共終数は正則なので、 $\text{Reg}(\beta)^M$  である。  $\theta \leq \beta < o(M)$  と合

わせて、仮定から  $\text{Reg}(\beta)^{M[G]}$  を得る。すなわち、 $\text{cf}^{M[G]}(\beta) = \beta$  である。さて、 $\beta = \text{cf}^M(\gamma)$  であるから  $M \models \exists X (X \subseteq \gamma \wedge \sup X = \gamma \wedge \text{type}(X) = \beta)$  が成り立っている。このような  $X \in M$  を固定する。 $\subseteq, \sup, \text{type}$  の  $M$  に対する絶対性より、 $X \subseteq \gamma \wedge \sup X = \gamma \wedge \text{type}(X) = \beta$  が成り立つ。ZFC で「 $Y \subseteq \delta : \lim \wedge \sup Y = \delta \implies \text{cf}(\delta) = \text{cf}(\text{type } Y)$ 」が成り立つ。そこで  $Y, \delta$  として  $X, \gamma \in M[G]$  を取れば、 $M[G] \models \text{ZFC}$  や  $\text{type}$  の絶対性などに注意して  $\text{cf}^{M[G]}(\gamma) = \text{cf}^{M[G]}(\text{type } X) = \text{cf}^{M[G]}(\beta) = \beta$  となるのでよい。□

**補題 4.**  $\text{Reg}(\theta)^M$  とする。このとき、 $\mathbb{P}$  が  $\theta$  以上の共終数を保つならば、 $\mathbb{P}$  は  $\theta$  以上の基数を保つ。

*Proof.*  $G: (M, \mathbb{P})$ -generic, および  $\kappa < \text{o}(M)$  で  $\kappa \geq \theta$  なるものを取り固定する。 $\text{Card}(\kappa)^M \leftrightarrow \text{Card}(\kappa)^{M[G]}$  を言えばよいが、注意 2 により “ $\leftarrow$ ” はよいので、“ $\rightarrow$ ” を示す。 $\kappa$  は、 $M$  で (1):  $\text{Reg}(\kappa)$  であるか、(2):  $\kappa$  は極限基数であるかのいずれかである。ただし、(1) と (2) が同時に満たされることもありうる。(1) と (2) で場合分け。(1):  $\text{Reg}(\kappa)^M$  のとき。 $\kappa < \text{o}(M) : \lim, \text{cf}^M(\kappa) = \kappa \geq \theta$  であり、 $\mathbb{P}$  が  $\theta$  以上の共終数を保つことから、 $\text{Reg}(\kappa)^M \iff \text{cf}^M(\kappa) = \kappa \iff \text{cf}^{M[G]}(\kappa) = \kappa \iff \text{Reg}(\kappa)^{M[G]}$  であることに留意せよ。ZFC で「 $\text{Reg}(\kappa) \rightarrow \text{Card}(\kappa)$ 」が成り立つので、そのモデルである  $M[G]$  でも成り立つ。よって  $\text{Reg}(\kappa)^{M[G]}$  から  $\text{Card}(\kappa)^{M[G]}$  を得る。(2):  $(\kappa \geq \theta \text{ が極限基数})^M$  のとき。 $\kappa = \theta$  であれば、 $\text{Reg}(\theta)^M$  との仮定および (1) の結果より  $\text{Card}(\theta)^{M[G]}$  を得るのでよい。そこで  $\kappa > \theta$  のときを考える。ZFC で「 $\kappa > \theta$  が極限基数ならば  $\kappa = \sup\{\alpha < \kappa : \text{cf}(\alpha) \geq \theta \wedge \text{Reg}(\alpha)\}$ 」が成り立つ\*1)ので、 $(\kappa \text{ が極限基数})^M \implies M \models \kappa = \bigcup\{\alpha < \kappa : \text{cf}(\alpha) \geq \theta \wedge \text{Reg}(\alpha)\} \implies M[G] \models \kappa = \bigcup\{\alpha < \kappa : \text{cf}(\alpha) \geq \theta \wedge \text{Reg}(\alpha)\} \implies \text{Card}(\kappa)^{M[G]}$ 。2 つ目の含意は、共終数の保存の仮定、および、先ほど指摘したように、この状況下で正則性が保たれる、つまり  $\text{Reg}(\alpha)^M \iff \text{Reg}(\alpha)^{M[G]}$  であることによる。最後の含意は、 $\text{Reg}(\alpha)$  より  $\text{Card}(\alpha)$  であり、基数の集合の  $\sup$  は再び基数になることによる。□

**補題 5 ( $\theta$ -Global Covering Property?).**

$$\left\{ \begin{array}{l} \mathbb{P} \in M \\ G: (M, \mathbb{P})\text{-generic} \\ (\theta \text{ は非可算基数})^M \\ (\mathbb{P} \text{ は } \theta\text{-cc をもつ})^M \\ A, B \in M \\ f: A \rightarrow B \\ f \in M[G] \end{array} \right. \implies \exists F: A \rightarrow \mathcal{P}(B) \text{ s.t. } \left\{ \begin{array}{l} F \in M \\ \forall a \in A (f(a) \in F(a)) \\ \forall a \in A (|F(a)| < \theta)^M. \end{array} \right. \quad (4)$$

補題のお気持ちは図 1 の通り。

*Proof.*  $f \in M[G]$  より、 $\dot{f} \in M^{\mathbb{P}}$  で  $\dot{f}_G = f$  なるものがとれる。 $M[G] \models “\dot{f}_G: \dot{A}_G \rightarrow \dot{B}_G”$  なので、真理補題より、ある  $p \in G$  が存在して  $p \Vdash “\dot{f}: \dot{A} \rightarrow \dot{B}”$ 。この  $p$  を固定する。各  $a \in A$  に対して  $F(a) := \{b \in B : \exists q \leq p (q \Vdash “\dot{f}(\dot{a}) = \dot{b}”)\}$  ( $\in \mathcal{P}(B)$ ) と定めよ (お気持ち: 「 $M$  から見た、 $f(a)$  として可能な値  $b$ 」を、とりあえず全部集めてくる)。定義可能性補題より  $F \in M$  である。この  $F$  が所望のものであることを見る。

\*1  $\kappa$  は極限基数なので、ある  $\eta : \lim$  を用いて  $\kappa = \bigcup_{\xi < \eta} \aleph_\xi$  と書ける。この  $\eta$  を固定せよ。 $\beta \in \sup\{\alpha < \kappa : \text{cf}(\alpha) \geq \theta \wedge \text{Reg}(\alpha)\}$  ならば、 $\exists \alpha < \kappa (\beta \in \alpha \wedge \text{cf}(\alpha) = \alpha \geq \theta \wedge \text{Reg}(\alpha))$ 。 $\text{Reg}(\alpha)$  なので  $\text{Card}(\alpha)$  である。このことと  $\alpha < \kappa$  より、ある  $\xi < \eta$  が存在して  $\alpha = \aleph_\xi$  と書ける。よって  $\beta \in \aleph_\xi$  である。逆に  $\beta \in \aleph_\xi$  とする。 $\exists \xi < \eta (\beta \in \aleph_\xi)$  である。 $\theta < \kappa$  に留意すれば、 $\max\{\theta, \aleph_\xi\}$  を  $\aleph_\zeta$  ( $\zeta < \eta$ ) の形に書ける。 $\kappa$  は極限基数なので  $\beta \in \aleph_{\zeta+1} < \kappa$  ( $\zeta + 1 < \eta$ ) となる。 $\alpha = \aleph_{\zeta+1}$  を証拠に  $\exists \alpha < \kappa (\beta \in \alpha \wedge \text{Reg}(\alpha) \wedge \text{cf}(\alpha) = \alpha \geq \theta)$  となるので、 $\beta \in \sup\{\alpha < \kappa : \text{cf}(\alpha) \geq \theta \wedge \text{Reg}(\alpha)\}$  を得る。

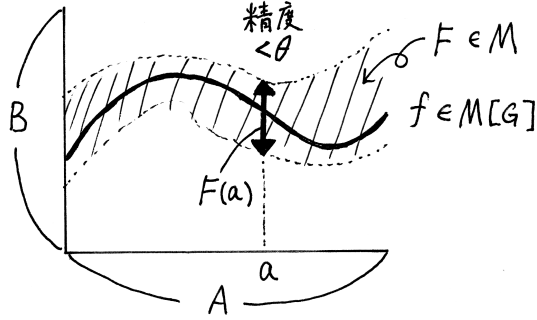


図1  $M$  は,  $M[G]$  の函数を精度  $< \theta$  で近似できる

$\forall a \in A (f(a) \in F(a))$   $a \in A$  を勝手に取り固定せよ.  $b := f(a)$  とせよ (want:  $b \in F(a)$ ).  $M[G] \models \check{b}_G = \check{f}_G(\check{a}_G)$  である. 真理補題により,  $r \Vdash \check{b} = \check{f}(\check{a})$  なる  $r \in G$  が存在する.  $G$  の filter 性より  $q \leq p, r$  なる  $q \in G$  が存在するが, この  $q \leq p$  について, 拡大補題より  $q \Vdash \check{b} = \check{f}(\check{a})$  である.  $q \leq p$  と合わせて,  $F(a)$  の定義から  $b \in F(a)$  を得る.

$\forall a \in A (|F(a)| < \theta)^M$   $a \in A$  を固定せよ. 各  $b \in F(a)$  ごとに存在が保証される  $q \leq p$  のうちのひとつを選び,  $q_b$  とせよ ( $M$  の AC を使っている. お気持ち: 「 $q_b$  は,  $f(a) = b$  の証人」). 函数  $g_a: F(a) \rightarrow \mathbb{P}$ ,  $g_a(b) := q_b$  は, 定義可能性補題より,  $M$  の元であることに注意せよ.

**Claim 1.**  $\forall b, c \in F(a) (b \neq c \rightarrow q_b \perp q_c)$ .

[ $\cdot$ ] 背理法.  $q_b \not\perp q_c$  なる  $b, c \in F(a)$ ,  $b \neq c$  が存在したとする. このとき  $\exists r \leq q_b, q_c (r \leq q_b, q_c)$  であるから, この  $r$  について,  $F(a)$  の定義と拡大補題から  $r \Vdash \check{f}(\check{a}) = \check{b}$  &  $r \Vdash \check{f}(\check{a}) = \check{c}$  である. よって,  $r \Vdash \check{f}(\check{a}) = \check{b} \wedge \check{f}(\check{a}) = \check{c}$ , したがって  $r \Vdash \check{b} = \check{c}$ . Rasiowa-Sikorski の補題より,  $r$  を元として含む  $(M, \mathbb{P})$ -generic filter  $H$  が存在する. 真理補題より  $M[H] \models \check{b}_G = \check{c}_G$ , したがって  $b = c$  となるが, これは  $b, c$  の取り方に矛盾する.  $\square$ (Claim 1)

以上の考察より,  $M \models \{g_a(b) (= q_b) \in \mathbb{P} : b \in F(a)\}$  は  $\mathbb{P}$  の反鎖\* が従う.  $M \models \mathbb{P}$  は  $\theta$ -cc をもつ” と合わせて,  $M \models \{g_a(b) \in \mathbb{P} : b \in F(a)\} < \theta$  である. したがって\*2,  $(|F(a)| < \theta)^M$  である.  $\square$

**補題 6.** ( $\theta$  は非可算正則基数  $\wedge \mathbb{P}$  は  $\theta$ -cc をもつ) $^M$  ならば,  $\mathbb{P}$  は  $\theta$  以上の共終数と  $\theta$  以上の基数を保つ.

*Proof.* 補題 4 によれば,  $\mathbb{P}$  が  $\theta$  以上の共終数を保つことを示せば十分である. さらに, そのためには式 (3) の右辺を示せば十分である.  $G: (M, \mathbb{P})$ -generic,  $\beta : \lim$  で  $\theta \leq \beta < o(M)$  なるものを固定する. 対偶  $\neg \text{Reg}(\beta)^{M[G]} \rightarrow \neg \text{Reg}(\beta)^M$  を示す.  $\neg \text{Reg}(\beta)^{M[G]}$  を仮定する (want:  $\neg \text{Reg}(\beta)^M$ ).  $\alpha := \text{cf}^{M[G]}(\beta) < \beta$  と定める. 共終数の定義より  $M[G] \models \exists X (X \subseteq \beta \wedge \sup X = \beta \wedge \text{type}(X) = \alpha)$  である. このような  $X \in M[G]$  を固定せよ.  $\text{type}(X) = \alpha$  の証拠となる唯一の順序同型  $f: \langle \alpha, \in \rangle \cong \langle X, \in \rangle$  をとる.  $\text{type}$  の絶対性より  $f \in M[G]$  である.  $X \subseteq \beta$  なので  $f: \alpha \rightarrow \beta$  でもある. 補題 5 により,  $F: \alpha \rightarrow \mathcal{P}(\beta)$  で  $F \in M$ ,  $\forall \xi < \alpha [(f(\xi) \in F(\xi)) \wedge (|F(\xi)| < \theta)^M]$  なるものを得る.  $Y := \bigcup_{\xi < \alpha} F(\xi) (\subseteq \beta)$  と定める.  $Y \in M$  である.  $X$  の任意の元は  $f(\xi)$  の形をしていて, それは  $\in F(\xi) (\subseteq Y)$  であるから,  $X \subseteq Y$  で

\*2  $M \models \text{“}g_a \text{ は単射”}$  を言う必要がある.  $M$  で議論する.  $b \neq c$  かつ  $g_a(b) = g_a(c)$  から矛盾させる.  $g_a(b) = g_a(c)$  とは  $q_b = q_c$  のことなので,  $q_b \not\perp q_c$ . これは  $\{q_b \in \mathbb{P} : b \in F(a)\}$  が反鎖であることに矛盾.

ある．よって  $\sup X \leq \sup Y$  である． $Y \subseteq \beta$  で  $\sup X = \beta$  だったので， $\sup Y = \beta$  である．今，仮定より  $(\beta$  は非可算正則基数) $^M$  である．このことと  $(Y$  は濃度  $< \beta$  の集合の  $< \beta$  個の和) $^M$  を合わせて， $(|Y| < \beta)^M$  を得る． $(Y \subseteq \beta \wedge \sup Y = \beta \wedge \text{type}(Y) < \beta)^M$  なので，この  $Y \in M$  は  $(\text{cf}(\beta) < \beta)^M$  の証人になっている．したがって  $\neg \text{Reg}(\beta)^M$  となり，証明が完了した．  $\square$

**補題 7.** 基数  $\lambda \geq \aleph_0$  に対し， $\mathbb{P} := \text{Fn}_\lambda(I, J)$  は  $(|J|^{<\lambda})^+$ -cc をもつ．

*Proof.*  $\theta := (|J|^{<\lambda})^+$  とせよ． $|J| = 0, 1$  のとき，明らか<sup>\*3</sup>．そこで  $|J| \geq 2$  を仮定する． $\theta$  は無限基数の後続基数なので正則である．また  $\theta > \lambda$  である<sup>\*4</sup>． $\mathbb{P}$  が濃度  $\theta$  以上の反鎖を持たないことを示す．そのためには， $\mathbb{P}$  が濃度  $\theta$  の反鎖を持たないことを示せば十分である<sup>\*5</sup>． $\mathbb{P}$  から勝手に取った部分集合  $\mathcal{C} := \{p_\alpha : \alpha < \theta\}$  が反鎖に成り得ないことを示す．この並べ上げに重複はないものとする．場合分け．

$\lambda$  が正則基数のとき 各  $\alpha < \theta$  に対し， $s_\alpha := \text{dom}(p_\alpha) \in [I]^{<\lambda}$  と定めよ．この  $\alpha$  を  $s_\alpha$  の背番号と呼ぶことにする． $\mathcal{A} := \{s_\alpha : \alpha < \theta\}$  と定める．

**Claim 1.**  $|\mathcal{A}| = \theta$ ．

[ $\cdot$ ]:  $\nu := |\mathcal{A}| < \theta$  から矛盾を導く． $|\mathcal{A}| = \nu$  より，重複を許さず  $\mathcal{A} = \{t_\beta : \beta < \nu\}$  と並べられる．すると，各  $p_\alpha$  ( $\alpha < \theta$ ) に対し，ある  $\beta < \nu$  が存在して  $p_\alpha \in {}^{(t_\beta)}J$  となる．ゆえに  $\mathcal{C} \subseteq \bigcup_{\beta < \nu} {}^{(t_\beta)}J$  となる．右辺の濃度を計算する．まず，各  $\beta$  に対して  $|t_\beta| < \lambda$  なので，補題の仮定より  $|{}^{(t_\beta)}J| \leq |J|^{<\lambda} < \theta$  である．よって右辺は濃度  $< \theta$  の集合の  $< \theta$  個の和なので， $\theta$  の正則性と合わせて  $|\text{右辺}| < \theta$  を得る．一方で，左辺  $\mathcal{C}$  の濃度は  $\theta$  なので，これは矛盾．  $\square$  (Claim 1)

**Claim 2.**  $(|J|^{<\lambda})^{<\lambda} = |J|^{<\lambda}$ ． (もつと単純な証明があれば教えてください >\_<)

[ $\cdot$ ]:  $\lambda$  が (1):  $\aleph_0$  であるか，(2): 後続基数  $\aleph_{\alpha+1}$  であるか，(3): 極限基数  $\aleph_\eta$  ( $\eta : \text{lim}$ ) であるかで場合分け．(1):  $\lambda = \aleph_0$  のとき． $2 \leq |J| < \aleph_0$  なら， $(|J|^{<\aleph_0})^{<\aleph_0} = (\sup_{n < \aleph_0} |J|^n)^{<\aleph_0} = \aleph_0^{<\aleph_0} = \aleph_0 = |J|^{<\aleph_0}$  となるのでよい． $|J| \geq \aleph_0$  なら， $(|J|^{<\aleph_0})^{<\aleph_0} = (\sup_{n < \aleph_0} |J|^n)^{<\aleph_0} = (\sup_{n < \aleph_0} |J|)^{<\aleph_0} = |J|^{<\aleph_0}$  となるのでよい．(2):  $\lambda = \aleph_{\alpha+1}$  なら， $(|J|^{<\aleph_{\alpha+1}})^{<\aleph_{\alpha+1}} = (|J|^{\aleph_\alpha})^{\aleph_\alpha} = |J|^{\aleph_\alpha \cdot \aleph_\alpha} = |J|^{\aleph_\alpha} = |J|^{<\aleph_{\alpha+1}}$  なのでよい．(3):  $\lambda = \aleph_\eta$  ( $\eta : \text{lim}$ ) のとき． $\lambda$  の正則性より  $\text{cf}(\lambda) = \lambda$  となる．非減少  $\lambda$ -列  $S = \langle |J|^\xi : \xi < \lambda \rangle$  について， $\lim_{\xi \rightarrow \lambda} |J|^\xi = |J|^{<\lambda}$  であるから， $\text{cf}(\lambda) = \text{cf}(|J|^{<\lambda})$  である ([2] Lemma 3.7 (ii))． $\lambda$  の正則性と合わせて  $\text{cf}(|J|^{<\lambda}) = \lambda$  を得る． $\nu := |J|^{<\lambda}$  とおく． $\forall \kappa < \lambda (\nu^\kappa = \nu) \cdots (*)$  を示す．そのために  $\kappa < \lambda$  を固定する． $\nu^\kappa = \nu$  を示すには，(i)  $\nu > \kappa$ ，(ii)  $\text{cf}(\nu) > \kappa$ ，(iii)  $\forall \mu < \nu (\mu^\kappa < \nu)$  を示せばよい ([2] Theorem 5.20 (iii-a))．第一に， $|J| \geq 2$  なので， $\kappa < 2^\kappa \leq |J|^\kappa \leq \nu$  となり  $\kappa < \nu$ ．第二に，先ほどの  $\text{cf}(\nu)$  の計算から  $\kappa < \lambda = \text{cf}(\nu)$ ．第三に， $\mu < \nu$  を勝手に取る．先の列  $S$  は  $\nu$  で非有界なので，ある  $(\omega \leq) \delta < \lambda$  が存在して  $\mu \leq |J|^\delta$  が成り立つ．両辺  $\kappa (< \lambda)$  乗すれば， $\mu^\kappa \leq |J|^{\delta \cdot \kappa} < \nu$  となりよい (最後の  $<$  について， $\leq$  は明らかだが，もし  $=$  なら  $\text{cf}(\nu)$  が  $\delta \cdot \kappa < \nu$  以下になってしまう)．以上で  $(*)$  が示せた．以上より  $(|J|^{<\lambda})^{<\lambda} = \sup_{\kappa < \lambda} (|J|^{<\lambda})^\kappa = \sup_{\kappa < \lambda} \nu^\kappa = \sup_{\kappa < \lambda} \nu = \nu = |J|^{<\lambda}$  となりよ

\*3  $|J| = 0, 1$  のとき  $(|J|^{<\lambda})^+ = 2$  である． $|J| = 0$  のとき  $J = \emptyset$  なので， $\mathbb{P} = \emptyset$  または  $\{\emptyset\}$ ．よって， $\mathbb{P}$  の反鎖としては  $\emptyset$  か  $\{\emptyset\}$  しかあり得ないので，2-cc が満たされる． $|J| = 1$  なら  $\mathbb{P} = \{s \times \{*\} : s \in [I]^{<\lambda}\}$  であり， $\mathbb{P}$  の反鎖は  $\emptyset$  か  $\{p\}$  ( $p \in \mathbb{P}$ ) しかあり得ないので，再び 2-cc が満たされる．

\*4 何となれば  $\lambda < (|J|^{<\lambda})^+$ ，すなわち  $|J|^{<\lambda} \geq \lambda$  を示せばよい． $|J|^{<\lambda} = \sup_{\kappa < \lambda} |J|^\kappa \geq \sup_{\kappa < \lambda} 2^\kappa \geq \sup_{\kappa < \lambda} \kappa^+ = \lambda$  なのでよい．

\*5 何となれば『サイズ  $\kappa$  ( $\geq \theta$ ) の反鎖が存在する  $\implies$  サイズ  $\theta$  の反鎖が存在する』は，反鎖の部分集合が再び反鎖になることから明らか．『』の対偶を取ればよい．

い.

□(Claim 2)

$\mathcal{A}$  に  $\Delta$ -システム補題を適用して,  $r \subseteq I$ ,  $|r| < \lambda$  なる集合  $r$  ならびに  $r$  を根とする  $\Delta$ -システム  $\mathcal{B}$  で,  $\mathcal{B} \subseteq \mathcal{A}$ ,  $|\mathcal{B}| = \theta$  なるものを得る\*6.  $\mathcal{B}$  の元の背番号全体の集合を  $B (\subseteq \theta)$  とせよ.  $\mathcal{B}$  は  $r$  を根とする  $\Delta$ -システムなので,  $\forall \alpha, \beta \in B (\alpha \neq \beta \rightarrow s_\alpha \cap s_\beta = r)$  が成り立つ. さて,  $|r| < \lambda$  より  $|rJ| = |J|^{|r|} \leq |J|^{<\lambda} < \theta$  である. 一方で  $\mathcal{B}$  の濃度は  $\theta$  なので, 鳩の巣原理より, ある  $\alpha, \beta \in B$ ,  $\alpha \neq \beta$  で,  $p_\alpha \upharpoonright r = p_\beta \upharpoonright r$  なるものが存在する (図 2). この  $\alpha, \beta$  について, 函数値が  $r \subseteq \text{dom}(p_\alpha) \cup \text{dom}(p_\beta)$  で一致するので,  $p_\alpha, p_\beta$  は函数として両立する. すなわち  $p_\alpha \not\perp p_\beta$ . したがって,  $\mathcal{C}$  は反鎖ではない.

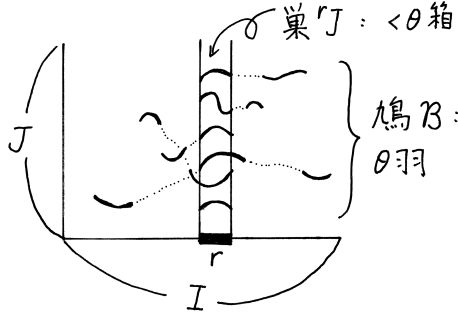


図 2  $< \theta$  箱の巣  $rJ$  と  $\theta$  羽の鳩たち  $\mathcal{B}$ . 点線は見易さのために描いたにすぎず, 本来は空白であるべきことに注意.

$\lambda$  が特異基数のとき  $\mathcal{C}$  を濃度で類別して  $\mathcal{C} = \bigsqcup_{\kappa < \lambda} C_\kappa$ ,  $C_\kappa = \{p \in \mathcal{C} : |p| = \kappa\}$  とせよ. もしも  $\forall \kappa < \lambda (|C_\kappa| < \theta)$  ならば,  $\mathcal{C}$  は濃度  $< \theta$  の集合の  $< \theta$  個の和なので,  $\theta$  の正則性より  $|\mathcal{C}| < \theta$  となり, 矛盾. よってある  $\kappa < \lambda$  が存在して  $|C_\kappa| = \theta$  である. この  $\kappa$  について,  $\mathcal{C}' := \{p \in \mathcal{C} : |p| < \kappa^+\} (\supseteq C_\kappa)$  は濃度  $\theta$  をもつ.  $\mathcal{C}' \subseteq \text{Fn}_{\kappa^+}(I, J)$  となっていることに留意せよ. 正則基数については補題が証明してある.  $\kappa^+$  は正則なので,  $\text{Fn}_{\kappa^+}(I, J)$  は  $(|J|^{<\kappa^+})^+$ -cc をもつ.  $\kappa^+ \leq \lambda$  より  $(|J|^{<\kappa^+})^+ \leq \theta$  なので,  $\text{Fn}_{\kappa^+}(I, J)$  は  $\theta$ -cc をもつ\*7.  $\mathcal{C}'$  は濃度  $\theta$  を持つため  $\text{Fn}_{\kappa^+}(I, J)$  で反鎖でない. よって, それより広い  $\mathbb{P}$  でも反鎖でない.  $\mathcal{C} \supseteq \mathcal{C}'$  より,  $\mathcal{C}$  は  $\mathbb{P}$  で反鎖でない. □

系 8.  $I, J \in M$ ,  $[\text{Reg}(\lambda) \wedge |J| \leq 2^{<\lambda} \wedge \theta := (2^{<\lambda})^+]^M$  ならば,  $\text{Fn}_\lambda(I, J)^M$  は  $\theta$ -cc を持ち, したがって  $\theta$  以上の共終数と  $\theta$  以上の基数を保つ.

*Proof.*  $(|J| \leq 2^{<\lambda})^M$  と  $\text{Reg}(\lambda)^M$  より, 補題 7 の Claim 2 と同様にして  $(|J|^{<\lambda} \leq (2^{<\lambda})^{<\lambda} = 2^{<\lambda})^M$  を得る. よって  $[ (|J|^{<\lambda})^+ \leq (2^{<\lambda})^+]^M$  である.  $M$  における補題 7 から  $[\text{Fn}_\lambda(I, J) \text{ は } (|J|^{<\lambda})^+$ -cc をもつ] $^M$ . よってそれ以上の  $(2^{<\lambda})^+$  でも言えるので,  $[\text{Fn}_\lambda(I, J) \text{ は } (2^{<\lambda})^+$ -cc をもつ] $^M$  が言える. つまり  $[\text{Fn}_\lambda(I, J) \text{ は } \theta$ -cc をもつ] $^M$ .  $I, J \in M$  と  $\text{Reg}(\lambda)^M$  (したがって  $\text{Card}(\lambda)^M$ ) より,  $\text{Fn}_\lambda(I, J) \in M$  である. さらに,  $(\theta$  は無限基数の後続基数) $^M$  なので  $(\theta$  は非可算正則基数) $^M$  である. 補題 6 により  $\text{Fn}_\lambda(I, J)$  は  $\theta$  以上の共終数と  $\theta$  以上の基数を保つことがわかる. □

系 9.  $I, J \in M$ ,  $(J$  は可算) $^M$  ならば,  $\text{Fn}(I, J)$  は ccc を持ち, したがって共終数と基数を保つ.

\*6  $\Delta$ -システム補題が使える条件 『(1):  $\lambda$  が無限基数, (2):  $\theta (> \lambda)$  は正則基数, (3):  $\forall \zeta < \theta (|\zeta^{<\lambda}| < \theta)$ , (4):  $|\mathcal{A}| \geq \theta$ , (5):  $\forall x \in \mathcal{A} (|x| < \lambda)$ 』を確認しなければならない. (1), (2), (4), (5) は明らか. (3): Claim 2 を用いることで,  $\zeta < \theta \implies \zeta < (|J|^{<\lambda})^+ \implies \zeta \leq |J|^{<\lambda} \implies |\zeta^{<\lambda}| \sim^{<\lambda} \zeta \sim^{<\lambda} |\zeta|^{<\lambda} \leq (|J|^{<\lambda})^{<\lambda} = |J|^{<\lambda} < \theta$  となるのでよい.

\*7 定義より直ちに, 『 $\mu \leq \nu$  について,  $\mathbb{P}$  が  $\mu$ -cc を持つならば  $\mathbb{P}$  は  $\nu$ -cc を持つ』ことがいえる.

*Proof.* 系 8 の  $\lambda = \omega$  の場合に当たる.  $M$  の中で  $\text{Reg}(\omega)$ ,  $|J| \leq \aleph_0 = 2^{<\omega}$ ,  $\theta = (2^{<\omega})^+ = \aleph_0^+ = \aleph_1$  となっているのでよい.  $\square$

## 参考文献

- 本稿では, 主に [5], Ch.IV, §7 を参考にしました. 対応する定理番号の明記は行っていません.
- [1] Devlin, K., *The Joy of Sets: Fundamentals of Contemporary Set Theory* (2nd ed.), Undergraduate Texts in Mathematics, Springer, 1993.
  - [2] Jech, T., *Set Theory: The Third Millennium Edition, revised and expanded*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, 2002.
  - [3] Kunen, K., *Set Theory, An Introduction to Independence Proofs*, Vol. 102. Studies in Logic and the Foundations of Mathematics, North-Holland, 1980. 邦訳 [13].
  - [4] Kunen, K., *The Foundations of Mathematics*, Vol. 19. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2009. 邦訳 [14].
  - [5] Kunen, K., *Set Theory* (rev. ed.), Vol. 34. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2011.
  - [6] Schindler, R., *Set Theory, Exploring Independence and Truth*, Universitext, Springer, 2014.
  - [7] Shoenfield. J.R., *Mathematical Logic*, Addison-Wesley, 1967.
  - [8] Takeuti, G. and Zaring, W.M., *Introduction to Axiomatic Set Theory* (2nd ed.), Vol. 1. Graduate Texts in Mathematics, Springer, 1982.
  - [9] Weaver, N., *Forcing for Mathematicians*, World Scientific Publishing, 2014.
  - [10] 新井敏康, 数学基礎論, 岩波書店, 2011.
  - [11] 菊池誠, 不完全性定理, 共立出版, 2014.
  - [12] 倉田令二郎・篠田寿一, 公理的集合論, 倉田令二郎監修・数学基礎論シリーズ 2 巻, 河合文化教育研究所, 1996.
  - [13] K. キューネン (藤田博司訳), 集合論-独立性証明への案内, 日本評論社, 2008. [3] の邦訳.
  - [14] K. キューネン (藤田博司訳), キューネン数学基礎論講義, 日本評論社, 2016. [4] の邦訳.
  - [15] 田中一之編・著, 数学基礎論講義, 日本評論社, 1997.
  - [16] 田中一之編, ゲーデルと 20 世紀の論理学 4 集合論とプラトニズム, 東京大学出版会, 2007.
  - [17] 田中一之・鈴木登志雄, 数学のロジックと集合論, 培風館, 2003.
  - [18] 田中尚夫, 公理的集合論, 現代数学レクチャーズ (B-10), 培風館, 1982.
  - [19] 田中尚夫, 選択公理と数学-発生と論争、そして確立への道 (増訂版), 遊星社, 2005.